

令和元年5月9日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02326

研究課題名(和文) 舞踏の独自性を解明するための比較演劇学的研究

研究課題名(英文) The Comparative Theatre Study for the Definition of Butoh Performance

研究代表者

小菅 隼人 (KOSUGE, Hayato)

慶應義塾大学・理工学部(日吉)・教授

研究者番号：40248993

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、舞踏の草創期である1960年代から発展期である1980年代までの日本の前衛演劇の上演を参照しつつ、舞踏の独自性を明確化し、歴史のおよび比較演劇の視点から、芸術様式としての舞踏に明確な定義を与えることにあった。それによって(1)中嶋夏、ビショップ山田、小林嵯峨、雪雄子、大野慶人、上杉満代という六人の関係者から貴重な一次証言を得ることができた。また、(2)土方巽振付の『マクベス』上演(1972)の調査報告、安田雅弘との対談、『中国のシェイクスピア』の書評、国際学会において包括的なアンケート調査も行った。この間、8件の研究論文、5件の国内外学会発表、3件の共著書の刊行をおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

体験的エピソードや劇評としての個別評価、あるいは哲学的・批評的分析はあったとしても、演劇としての内面表現の方法に着目して、長時間インタビューを中心とした実地調査と資料分析によって舞踏の成立を明らかにしようとした研究はこれまで殆どなく、本研究によって、舞踏を含めた日本の現代演劇の文化的共通性(普遍的性格)と現代日本のパフォーマンスに特有の文化的異質性(特異的性格)を明らかにできた。また、本研究は、これらの課題に取り組むことによって、日本を中心に行われている「舞踏」研究と海外を中心に行われている「BUTOH」研究を総合し、より包括的な演劇・パフォーマンス研究への道を拓くものでもあった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the uniqueness of Butoh performance so as to find a clear definition for that avant-garde Japanese dance style with reference to the historical development of the Japanese contemporary theatres from 1960s to 1980s including Japanese Shakespearean productions. Through the research period from 2016 to 2018 valuable information about Hijikata Tatsumi have been collected with the interviews to six Butoh performers who have been deeply involved in the creation of Butoh such as Ohno Yoshito, Bishop Yamada, Nakajima Natsu, Kobayashi Saga, Yuki Yuko, and Uesugi Mitsuyo. Moreover, the research articles about the Macbeth choreographed by Hijikata Tatsumi, the challenge of Yasuda Masahiro and the development of modern Chinese Shakespearean productions have been published. In addition, the statistical approach for the Butoh images was conducted. 8 research articles, 5 presentations in academic conferences and 3 co-authored books have been published.

研究分野：演劇学

キーワード：舞踏 土方巽 大野一雄 シェイクスピア 現代日本演劇 北方舞踏派

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本国内外の舞踏については、国内では、土方と同時代を生きた芸術家・評論家らによる回想録（元藤燐子『土方巽とともに』1990、種村季弘『土方巽の方へ』2001）の刊行に続き、本格的な舞踏研究の進捗とともに、舞踏の方法論（森下隆『土方巽 舞踏譜の舞踏——記号の創造、方法の発見』2010）や作品論（慶應義塾大学アート・センター編『肉体の叛乱——舞踏 1968 / 存在のセミオロジー』2009）へと研究が広がっていた。さらに、土方巽の舞踏のみならず言葉や文章も高く評価され、考察の対象となっていた（京都造形芸術大学舞台芸術研究センター編『土方巽—言葉と身体をめぐる—』2011、中村文昭『「土方巽」研究序説』2013）。一方で海外研究者による舞踏研究の出版も相次いだ。例えば、B. Baird, *Hijikata Tatsumi and Butoh*, 2012 のような舞踏を主要なテーマとした研究書の刊行が相次ぎ、博士論文が見られるようになった。ここでは、研究の方向性としては、舞踏を美学や身体論、社会・文化史的な視点から解明しようとする研究が顕著であった。研究開始当初、本研究が参照しようとしたシェイクスピアの日本への受容について、英語圏の定評ある出版社から刊行された纏まった論文集として、*Shakespeare and the Japanese Stage*. Edited by Takashi Sasayama, J. R. Mulryne, Margaret Shewring. Cambridge: Cambridge UP, 1998 および *Performing Shakespeare in Japan*. Edited by Ryuta Minami, Ian Carruthers, John Gillies. Cambridge: Cambridge UP, 2001 があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、演劇・ダンス・パフォーマンスの境界領域にあり、いまだ芸術ジャンルとしての明確な定義が定まっていない「舞踏」(BUTOH) に対して、歴史的および比較演劇学的視点から、明確な定義を与え、舞踏の独自性を解明することにあった。その際、特に、舞踏の草創期である 1960 年代から発展期である 1980 年代までの現代演劇、および、日本のシェイクスピア上演を参照し、舞踏を日本の演劇風土の中において内面表現の特徴と外面表現の革新性を明らかにすることでその独自性を明確化することにあった。舞踏に明確な定義を与えるという研究の大目的において、戦後日本の舞踏と西洋伝統芸術、とりわけシェイクスピア上演作品を視野に入れることで、舞踏の独自性と普遍性を、歴史的、比較演劇学の視点から考察し、演劇における内面表現の方法と展開をグローバルな視点から明らかにすることができる考えた。

3. 研究の方法

本研究は、関係者へのインタビュー 関係機関での調査 資料の発掘収集と分析 国際的な学術交流と発信の方法をもって行われた。平成 28 年度は、シェイクスピア受容史、インタビューと現地調査による一次資料の発掘、転回期の舞踏に関する調査を進め、同時に、調査結果を海外の研究者と共有した。平成 29 年度は、集中的に関係者へのインタビューを行うと共に、特に現代の演劇上演の土着志向について取材・資料収集を行い分析し、さらに国際学会における成果公開も積極的にすすめた。平成 30 年度には、引き続き、舞踏家へのインタビューを行い、調査結果を総括するとともに、国際学会での発表によって成果の共有を進めた。

4. 研究成果

- (1) 現代演劇におけるシェイクスピア上演を視野に入れて、現代演劇として舞踏を見るという点において代表的な成果として次の四点をあげる。

論文「劇団雲版『マクベス』（1972年）における土方巽振付の魔女について」に纏められた土方舞踏の本質的性格の発見．

対談「現代日本演劇とシェイクスピア 安田雅弘氏（山の手事情社主宰）に聞く」に纏められたシェイクスピアと現代演劇，アングラ演劇についての証言の記録．

書評「中国のシェイクスピア」（『日本演劇学会紀要：演劇学論集』63号，2017）に纏められた，現代シェイクスピアの中国における展開の評価と纏めの公開．

国際共同研究「シェイクスピアと舞踏」の開始．

（1） について

1972年10月，劇団雲は，福田恆存訳，荒川哲生演出の『マクベス』を上演した．この上演においては，土方巽が魔女（Three Witches）の振付を担当している．そしてこの上演は，後に土方の代表作と呼ばれるようになる連続公演『燐犠大踏鑑 四季のための27晩』のなかの最初の一作である「瘡瘡譚」とほぼ同時期である．この時期までの4年間，土方は，1968年の『土方巽と日本人 肉体の叛乱』から「瘡瘡譚」まで舞台上に立っておらず，また，68年と72年の間に大きく作風を変えたことはよく知られており，その意味で，この振付作品は舞踏研究上きわめて重要な出来事と言ってよい．また，土方がシェイクスピアと関わる唯一の作品でもある．

連続公演『燐犠大踏鑑 四季のための27晩』は，ダンスとしては異例ともいべき観客数を記録した．すなわち，客席数400のアートシアター新宿文化において27日間の全日程を通して総計8500人以上の観客を動員したのである．しかし他方，劇団雲版の『マクベス』は，神山繁と岸田今日子をはじめとする，その話題性に富んだキャストとスタッフにも拘わらず，最悪と言っていいほどの酷評を得ている．そして，これらの批評においては，土方の振付には勿論，魔女についても殆ど触れられていない．当時反正統的な前衛芸術家としてやはり話題性のあった土方巽にわざわざ振付を依頼し，プログラムの表紙絵にも三人の魔女の写真が大きく使われていることからわかるように，劇団側の意図として魔女の表現がこの『マクベス』の一つの呼び物として意識されていたにもかかわらずである．「瘡瘡譚」の大成功と『マクベス』の大不評，この差はいったい何を意味するのかということの問題意識として，劇団雲版『マクベス』における，土方巽振付による魔女の実態がどのようなものであったのか，そしてこの上演の中での魔女はどのように位置付けられるかという二点について考察した本論は，この時期の舞踏研究のみならず，シェイクスピア上演史研究において重要な論考となった．

（1） について

安田雅弘は，現代日本演劇を代表する演出家の一人である．安田は，『オイディプス』やイブセン作品など西洋古典戯曲の演出に積極的に取り組み，シェイクスピア作品も数多く演出している．そのラインナップには，1995年の『ロミオとジュリエット』を皮切りに，『十二夜』『夏の夜の夢』『じゃじゃ馬ならし』『ハムレット』『タイタス・アンドロニカス』『トロイラスとクレシダ』『テンペスト』があるが，その中でも，『タイタス・アンドロニカス』は異なったバージョンで5回にわたって上演されており，山の手事情社の代表作と言っていい（「安田雅弘の実績年表」より，「山の手事情社」ホームページ掲載）．この作品は，シェイクスピアの中でも特に暴力的なアクションが際立っているが，安田版の『タイタス・アンドロニカス』は，動作と発声を意識的に制限するスタイルによって，その暴力性を芸術表現に昇華すると同時に，暴力の奥底にある本質的恐怖を浮き出させている．その意味で，歌舞伎の暴力表現と通じるものがあり，1960年代に土方巽が創造した暴力性の表現をさらに昇華させたものとも言える．これは，戦前，およびアングラ以前のシェイクスピア受容から，舞踏の草創期の演劇風土である1960年代から90年代を踏まえた上で新しいシェイクスピア像を提示しており，新しい舞踏の展開に示唆を与えるものと考えられる．実践家から引き出された以上の知見と証言は今後，

このテーマの一次資料として貴重なものであると考えられる。

(1) について

『中国のシェイクスピア』は、『中国話劇成立史研究』(東方書店, 2005年)の著者である瀬戸宏が, 中国のシェイクスピア受容に焦点を絞って新たに書きためた論考を纏めたものである。序章, 全八章, 附章および年表等からなる。この業績は, 中国のシェイクスピア受容を, 確かな問題意識と精密な調査によって鳥瞰したものとして, 河竹登志夫『日本のハムレット』に匹敵するものと研究代表は高く評価し, ほぼ各章ごとに本書を概観した。同時に, 瀬戸氏は, 附章「日本のシェイクスピア受容略史」と題し, 河竹登志夫の『日本のハムレット』などを参照しつつ, 日本におけるシェイクスピア受容史研究に新しい視点を提示している。受容史の三期区分を, a) 第一段階, 幕末明治維新から 1911 年前後まで, b) 第二段階, 1911 年文芸協会(後期)第一回公演『ハムレット』前後から 1970 年代中期まで, c) 第三段階, 1970 年代中期のシェイクスピア・シアター活動開始前後から現代までとして, 第三段階を 1955 年文学座の『ハムレット』を起点とする河竹登志夫の説に変更を加えていることは特質に値するが, シェイクスピアの現代での受容を瀬戸の著作を通じて評価し, グローバルな視点に広げることで, 舞踏とシェイクスピアの関係を考察する基礎資料として位置付けたことは本研究の一つの成果と考える。

(1) について

2018 年 8 月, 研究代表者は, マラヤ大学 Senior Lecturer の Su Mei Kok 氏より, 「東南アジアにおける舞踏シェイクスピア」(Butoh Shakespeare in Southeast Asia) の提案を受けた。これは, 上記 A-1 の論文及び, 後述の国際学会での発表での一つの成果である。研究代表者はこれを受け入れ, Kok 氏は, 現地の住友財団に研究補助を申請し, 2019 年春に採用の通知を受け取っている。アジアのレベルで新たな共同研究の萌芽が出来たことは本研究が将来に繋がるものとして大きな成果であると考えられる。

(2) 舞踏家の直接証言による舞踏研究の基盤構築について, 代表的な成果として次の六点をあげる。

- 中嶋夏へのインタビュー録取, 事実確認, 解説を付しての公刊
- ビショップ山田へのインタビュー録取, 事実確認, 解説を付しての公刊
- 小林嵯峨へのインタビュー録取, 事実確認, 解説を付しての公刊
- 雪雄子へのインタビュー録取, 事実確認, 解説を付しての公刊
- 大野慶人へのインタビュー録取, 事実確認, 解説を付しての公刊
- 上杉満代へのインタビュー録取, 事実確認, 解説を付しての公刊

研究代表者は, 本研究期間を通じて, 中嶋夏, ビショップ山田, 小林嵯峨, 雪雄子, 大野慶人, 上杉満代への長時間の聴き取りを実施し, 本人の確認と加筆, 訂正, 研究代表者による事実確認を経て学術雑誌において発表してきた。大野慶人は, 1959 年の『禁色』において土方巽と共に共演しており, その意味では舞踏の創始者のひとりとも言える。また, 中嶋夏は, 土方巽の初期の弟子であり女性舞踏手としては現在活動中の最高齢の一人である。小林嵯峨は土方門下の「三人娘」のひとりと言われ, 土方舞踏の確立に中心的な役割を担った。また, ビショップ山田と雪雄子は土方の薫陶を受けた後, 北方舞踏派, 鈴蘭党(女性舞踏グループ)を結成し, 山形県鶴岡, 北海道小樽を拠点に, 舞踏を地方に広める役割を果たした。上杉満代は特に大野一雄の薫陶を受けた女性舞踏手である。これらの舞踏手は 1960 年代から 90 年代にかけて, その時代を経験しつつ, 舞踏の歴史において重要な役割を果たし, その証言自体がすでに貴重な一次資料としての価値を持つ。しかも, これらの舞踏手はいずれも 60 歳代後半から 80 歳代となり,

その証言が聞ける機会は長くない。実際、研究代表者がこの作業を始めてからも、比較的若いはずの室伏鴻，和栗由紀夫が予期せずこの世を去り，また，土方と並んで，舞踏家たちに影響を与えた石井満隆も，何回か面談はしたもののインタビューが出来ないままに2017年7月に逝去した。この三年間において，六人の舞踏家のインタビューを実施でき，その中で，本研究テーマである「舞踏の独自性」についてそれぞれの舞踏家の立場から証言を得られ，それを本人との文書による承諾を得て，公刊しえたことは舞踏研究にとっては非常に貴重な成果を得られたと自負している。

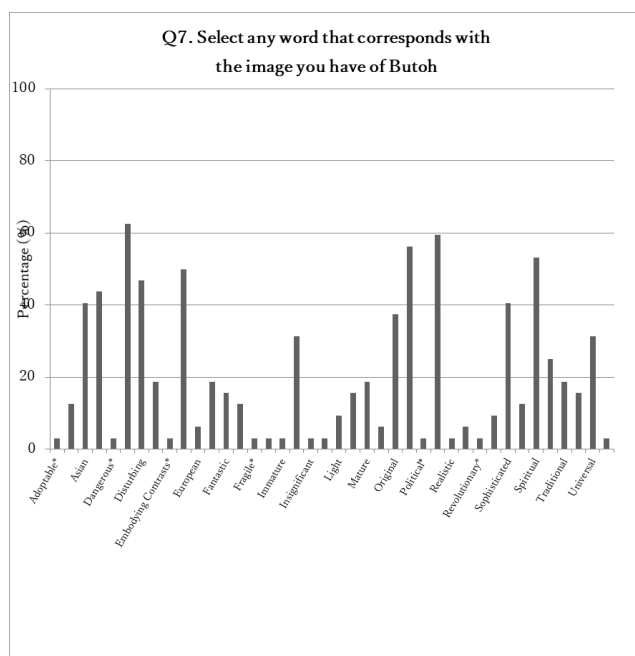
この中で，研究代表者は，舞踏という芸術が，そのジャンルの選択においても，そのスタイルの創出においても，日本舞踊，バレエ，演劇など確立されたどの芸術にもまして，時代性と共に，個人の人格と人生に密接に関わっていることが明らかになったと考えている。このことは，本人との接触なくしては解明しえず，また長時間の証言録取ができていない笠井叡，森繁哉，山本萌，玉野黄一，大須賀勇などの舞踏家，および写真家の細江英公など，すでに高齢に達した舞踏関係者への聞き取りが是非とも必要であることに気がつかされたことを付記しておく。

(3) 舞踏および現代演劇についての英文の著作物として以下の三点を挙げる

Hayato Kosuge and Rina Otani, 'Butoh and Its Image: A Statistical Approach' (Keio University Art Center Annual Report (2016/2017), 2017)の発表。

Routledge Companion to Butoh Performance (Routledge, 2018) の中で，“The Expanding Universe of Butoh: the Challenge of Bishop Yamada in Hoppo Butoh-ha and *Shiokubi* (1975)” の章を執筆。

Routledge Companion to Theatre and Politics (Routledge, 2019) の中で，“Against Staging Apocalyptic Disasters with Butoh Dance: Ohno Yoshito's *Flower and Bird / Inside and Outside*” の章を執筆。



本研究では，国際的な場で舞踏についての議論喚起を行うことを目標としている。そのため，研究代表者は英文においても研究業績を発表した。このうち，とは，舞踏および現代パフォーマンスについて，国際的に定評のある出版社からのもので，今後，舞踏研究においてスタンダード・レファレンスになるものである。においては，北方舞踏派について，においては，東日本大震災に際しての大野慶人の舞踏について分析した。は，大谷理奈との共同調査で，舞踏のイメージについて国際学会において網羅的な調査を行った。左図はその質問項目

(Q7)のイメージ調査について得られて結果であるが，このような「外側からの」舞踏のイメージについての統計的研究はいまだなく，貴重な資料になったと考えられる。

5. 主な発表論文

[雑誌論文](計8件)

小菅隼人「繋がっていること，独りであること 舞踏家上杉満代に聞く」『慶應義塾大学日吉紀要：人文科学』34号．査読無．2019．

小菅隼人「祈りとしての舞踏 舞踏家大野慶人に聞く」『慶應義塾大学日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション』50号．査読無．2018．

小菅隼人「漆黒の闇から純白の拡がりへ 舞踏家雪雄子に聞く」『慶應義塾大学日吉紀要：人文科学』33号．査読無．2018．

小菅隼人「包み込む闇の身体 舞踏家小林嵯峨に聞く」『慶應義塾大学日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション』49号．査読無．2017．

Kosuge, Hayato and Rina Otani. "Butoh and Its Image: A Statistical Approach." In *Keio Art Center Annual Report No. 24 (2016/2017)*. 査読無．2017.

小菅隼人「北に向かう身体をめぐって 舞踏家ピショップ山田に聞く」『慶應義塾大学日吉紀要：人文科学』32号．査読無．2017．

小菅隼人「身体とその奥にあるものをめぐって 舞踏家中嶋夏に聞く」『慶應義塾大学日吉紀要：言語・文化・コミュニケーション』48号．査読無．2016．

小菅隼人「劇団雲版『マクベス』(1972年)における土方巽振付の魔女について」『慶應義塾大学アート・センター年報(2015/2016)』23巻．査読無．2016．

〔学会発表〕(計5件)

小菅隼人「演劇にみる《王の二つの身体》 軍神，天皇，Kaiserin 問題提起」．日本演劇学会西洋比較演劇分科会．成城大学．2019/01/12．

Kosuge, Hayato. "Curated Panel: Migrating/Migrated Bodies in Japanese Context." Annual Conference of Theatre Studies. University of Serbia. 2018/07/10.

Kosuge, Hayato. "The Urbanity and Locality of Northern Butoh School from Fukushima Perspective." International Federation of Theatre Studies. University of Sao Palo. 2017/07/11．

Kosuge, Hayato. "Overflowing Local Bodies in Global Age: Introduction." Performance Studies international. Kampnagel, Hamburg. 2017/06/09．

Kosuge, Hayato. "Staging Past Disasters with Butoh Dance: Ohno Yoshito's "Flower and Bird/Inside and Outside." International Federation of Theatre Studies. University of Stockholm. 2016/06/17．

〔図書〕(計3件)

Kosuge Hayato. *Routledge Companion to Theatre and Politics*. "Against Staging Apocalyptic Disasters with Butoh Dance: Ohno Yoshito's *Flower and Bird / Inside and Outside*." New York: Routledge, 2019. 364 p. [共著分担]

Kosuge Hayato. *Routledge Companion to Butoh Performance*. "The Expanding Universe of Butoh: the Challenge of Bishop Yamada in Hoppo Butoh-ha and *Shiokubi* (1975)." New York: Routledge, 2018. 558 p. [共著分担]

小菅隼人『演劇を問う、批評を問う ある演劇研究集団の試み』「第1部第7節『リチャード三世』をめぐって」論創社，2017．380 p. [共著分担]

6．研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：宮川 麻理子

ローマ字氏名：MIYAGAWA, Mariko